

友の会だより

孺恋郷土資料館

2012年 8月 日 No 14

ボランティアガイド養成講座

孺恋郷土資料館「友の会」では、6月と7月、ボランティアガイドのスキルアップのための養成講座を開催した。これには講師として関俊明氏（6月）、田村喜七郎氏（7月）が出席、関氏は、防災・減災という観点から、災害の語り継ぎの重要性を訴え、田村氏は、江戸時代の孺恋の街道について話をし、往時のふるさとのにぎわい、各地の興味深いエピソードなどを紹介した。



天明3年の浅間山噴火災害から学ぶ

「語り継ぎ」の重要性強調

=関俊明氏=

6月17日午後1時半から孺恋郷土資料館で開かれた養成講座は、2010年3月、関氏が阪神淡路大震災の地・神戸で開かれた「世界災害語り継ぎフォーラム」に出席し、「天明3年浅間山噴火災害の語り継ぎ」について報告した際、震災時、兵庫県知事であられた貝原俊民氏から「震災直後、群馬県から当時の小寺弘之知事を通して多額の義捐金をいただいた」との感謝と、「あのような暖かい行為の背景・根底には、鎌原の精神が県民意識へとつながっているので開かれた。再建された鎌原村に噴火犠牲者33回忌のこと。このころになってようやくかたまりになったと考えられ、このころかたまりになったのではないかと推測される。そして、その念仏は、今も孺恋村鎌原地区の人々によって続けられているばかりか、観音堂奉仕会では1年中欠かさず交代で観音堂に詰め、先祖の供養を行うとともに、訪れる人たちへ、災害の恐ろしさ、当時の状況などを語り続けている。また、そうした鎌原

人々の記憶が「防災減災」の役割を



村の哀話や、天明3年の災害時の助け合いはないか」との話があったことから論は展の供養碑が建立されたのは、文化12年で、地域挙げての法要を営み、供養碑が建てられ生き残った村人たちによる念仏講が始まった



鎌原観音堂

の人々の行動は、着実な広がりを見せているのだ。天明3年の浅間山噴火災害を伝える郷土資料館に於いては、ボランティアガイドが活躍しており、県内外から来館する多くの人々に災害の凄まじさ、常に防災意識を持ち続けることの大切さなどを全国へ発信している。

そして関氏は語る。「歴史の上での出来事や、伝えられる文化を知ることを通して、人々の記憶が防災・減災に向かわせる機能をもっている」と。

..... ~

「信州街道」と「沓掛街道」を語る =田村喜七郎氏=

孀恋の往時のにぎわいを偲ぶ



長年、郷土史の研究を続けてこられた田村氏を招いての養成講座は、7月22日午後1時半から孀恋郷土資料館で開かれた。田村氏は、実地に踏査して作った地図を参照し、江戸時代の街道事情について、様々な角度から講義。街道は戦国時代のような戦略上の意味合いがなくなり、経済の発達による物資輸送路として、また民衆文化の発展に伴って旅行経路として、その重要性が増したとの意味の話があり、

「信州街道」「沓掛街道」を中心にした現在の孀恋村を經由する街道の繁栄ぶりが語られた。中でも信州から高崎への経路は、北国街道の裏街道とも言うべき善光寺～仁礼～大笹道を経て大戸～三の倉～高崎に至る道の方が近道で、関所があった大笹の宿を中心に物資運搬の中継点として大いににぎわったという。ここでは、仁礼から運んだ荷のチェックが行われ、今度は大笹の宿から沓掛街道を辿って中山道・沓掛宿へ運ばれた。

沓掛街道は、一般的だったのは浅間腰道六里と言われる浅間山東麓を通るルートである。大笹の宿～鎌原用水～ひょうしの土手～分去れ茶屋～鼻田峠（峰の茶屋）を通過して中山道・沓掛宿へ達する、いわゆる大笹線（沓掛道あるいは大笹道とも言われた）である。鎌原線は、鎌原～一匡邑（古滝）～鎌原分去れ～大笹分去れ～沓掛宿



修復中の大笹関所跡

のルート。草津線とも呼ばれた狩宿線は沓掛宿～狩宿（新田）～吾妻（石止、のちに草軽電鉄の吾妻駅）～大津を経て草津に至る。このルートは草津湯道とも呼ばれた。 (By ガンビ―)